論文の内容の要旨

論文題目　園における 3 歳児積み木場面の検討

氏名　　宮田　まり子

本論文は，園に設置された積み木に対して 3 歳児が行なう行為，及びその積み木を介して行なわれる他児との相互行為についての過程を検討することを目的とする。幼児教育は環境を設定することから始まるが，法制上に具体的で詳細な物の設置や配置の義務はない。現状では幼稚園が培ってきた文化と各園の歴史を引き継ぎ，各園の保育者たちが幼稚園教育要領等に則って作成する保育計画に沿って判断し設置している。積み木は，保育教材としての歴史が最も古く，普及率も高い。しかし積み木を含め，日本の幼児教育分野における積み木に関する教材研究は未だ少なく，幼稚園設立(1840 年)より乳幼児の保育に必要な物として設置されてきたにもかかわらず，その価値や意義を究明した知見は殆どない。そのため，積み木などの教材によって構成配置される物的環境がいかにして幼児間の関係をつなぎ，発達を支援しうるかについては明らかにされておらず，効果的かつ実践的な支援方法についても提案されていない。そこで本論文では，園における 3 歳児が，積み木を介して他児と相互行為を行なう実際の様子から，積み木という教材が 3 歳児の相互行為に及ぼす影響について検討する。本論文は全 3 部 7 章からなる。

第 I 部『問題と目的』ではまず，積み木における相互行為に関する先行研究を概観し，日本の幼児教育施設に広く普及している積み木に対し，関係性構築に関する分析の可能性を検討した。積み木は，①数学的概念獲得の可能性②相互行為の促進が期待される教材であるとの知見が示されており，積み木の形状や設定条件(時間や配置など)によってそれらの効果が異なるといったことが示されている。また，①積み木の個数に限らず他者との衝突は生起すること②性差無く行なわれている可能性があること③発話数と相互行為の内容は構築物の複雑さと必ずしも関係しないことがわかり，④3 歳児クラスでの観察においては，一人から共同へと変化していく過程の観察が期待できることが示された。保育者については，言語のみならず身体的関わりとして行為にも着目する必要性が示唆されている。加えて，園の中での相互行為については，園という場が既に多様な要因を持ち，更にそれらの要因が関係し合い新たな要因が生成さ

れている可能性がある。また言語など様々な文化の獲得期である幼児期の特性として，身体的な同調といった必ずしも可視化されないものの影響を受けながら，自らも場の要因の生成に関わっている可能性も示唆されている。園の中での相互行為に関わる要因が，個の発達のみにあるのではなく，クラス集団の中での見え(他者評価)が相互行為の機会の獲得に影響する等，多様な要因が関係した結果である可能性も明らかになっている。よって，これら先行研究に示された要因に着目しつつ，観察を継続していく中で，行為者同士によって生成される意味世界としての相互作用とその行為を取り出し，予め特定のカテゴリを設定するのではなく，探索的に事象のあらゆる文脈に可能性を持たせつつも詳細で微視的な分析を試みる。

第 2 章と第 3 章では，本論文の構造と方法を提示した。本論文は幼児が幼児教育施設における様々な環境に誘発されながらも，自ら外的環境に向かい，関係を構築させていく過程を明らかにすることを目的にしている。一般に幼稚園への入園は，人生における最初の移行となる。幼児は，家庭には無い新たな環境に気づき，それを受け入れて活動の範囲を広げ，多様な体験を積み重ねていく。幼児が幼稚園への入園を迎える頃は，保護者以外の周囲の他者の言動に興味や関心を示す発達的段階でもある。よって本論文では，幼児教育施設の中でも幼稚園の 3 歳児を対象とする。具体的には，自由保育中心の保育を行なう幼稚園に研究協力を依頼し，登園から昼食，または降園までの間で自ら積み木場面に関わる 3 歳児の参与観察を行なった。観察は入園後約 1 週間から始めた。最初は保育者の補助をするなどして保育に参加して，外部者の観察が生起させる場の緊張を軽減するよう努めた。幼児の生活が安定し始めて積み木場面が観察されてからは，幼児とは距離を置いて観察した。観察後，メモとビデオカメラを基に記録を作成した。第一段階の観察を 2011 年 4 月から学年の終わりまでの間(内 68 日間)で行ない，3 歳児クラス積み木場面の 1 年の過程を第 4 章で明らかにし，その後年間の変化の要因として特定された，積み木の構築の変化に着目した観察を，2012 年 9 月から 11 月までの観察(24 日間)にて行ない，特定の場面における行為を第 5 章において分析することにした。第 6 章ではそれらの期間の積み木場面での保育者の参加と支援と幼児の相互行為との関係を検討した。

第Ⅱ部『3 歳児積み木場面の実証研究』では，探索的に①3 歳児クラス積み木場面の 1 年の過程を観察し，積み木という教材を介し，幼稚園 3 歳児がどのように他児と相互行為していくのか(第 4 章/研究 1)を明らかにし，そこから精査的に②積み木固有の変化場面を取り出し，構築物の変化と行為との関係について(第 5 章/研究 2)③人的環境としての保育者の 3 歳児積み木場面への参加と幼児の相互行為との関係(第 6 章/研究 3)の 2 点の研究を行なって検討した。

第 4 章では，3 歳児積み木場面の 1 年間の変容過程について，入園一週間後からの参与観察において得られた事例を基に，積み木への行為と発話，積み木の構築物の変化に着目して分析を行なった結果と考察について述べている。3 歳児の積み木場面の一年では，①積む目的の出現と相違の時期(6～7 月）②積み上がった構築物に対するイメージの表出と共有化へ向かう時期(9 月～2 月）③積み上げに対する役割についての言及がある等の協働の時期(3 月)という 3 つの時期に区分されることが明らかになった。また，これらの時期の変化は，積み木の構築物の「崩れ」が関係している可能性が示唆された。積み木の構築物の変化としての「崩れ」が，積み手の積み木に対するイメージを言語化させ，積み上げの目的達成のための他者への働きかけを認識させることにより，積み木を使う者同士の相互行為を促進させている可能性がみられた。

そこで第 5 章では，幼稚園 3 歳児積み木場面において，積み上げた積み木が崩れるという構造の変化

が行為者に及ぼす影響について，行為の変化の要因となった積み木の「崩れ」に着目し，(1)どのような場面において肯定的な応答が生起するのか(2)崩れという物的な環境の変化が 3 歳児の積み木場面にいかなる影響を及ぼすのかの 2 点についての検討を行なった。結果，肯定的な応答が生起するのは積み手に積み上げに対する目的が無い場合であり，積み木に関わる複数の積み手の目的が他者との場の共有にある場合，崩れに対する他者の応答と同調するなど，他者の行為の影響を受けることが示唆された。また，崩しによって明らかになった目的の異なりによって，他者への働きかけを意味する行為が確認された。これらは 3 歳児がクラスの中で自ら他児と応答的コミュニケーションを介して関係を形成するという能動的な姿勢があることを示す。

第 6 章では，幼稚園 3 歳児の積み木場面における保育者の関わりを検討した。人的環境としての保育者は 3 歳児積み木場面にどのように参加し，幼児の相互行為と関係しているか，また保育者は積み木の場をどのように展開させていくのかについて検討を行なった。結果，保育者参加の積み木の場面では，保育者の発話と行為によって①幼児のイメージを膨らませて展開させていく場合②複雑な構築を目指して展開される場合の 2 つの展開が確認された。①については，保育者は幼児の発話を再生するなどして承認し，幼児の行為と同調して幼児のイメージを促進したり支持したりして展開を支援していた。②については，言語によるイメージの伝達のみでなく，積み上げを期待する箇所に適当な形体の積み木を指示するなどの具体性と，積み上げ後への構築物に対する意味付けの有無がその後の場の継続や展開に関係する可能性が示唆された。

第Ⅲ部『総合考察』では，これまでの知見をまとめ，園における 3 歳児の積み木場面での意義を提示すると共に今後の課題を検討した。本論文では，そのような積み木の特性と積み木場面固有の行為に着目して，探索的に長期的な観察を記録し，それらの結果からより焦点化した観察の記録においてより微視的な分析を行なった。結果，3 歳児が特に積み木の「崩れ」を刺激として他児の意図を理解したり，他児への働きかけを促進させたりしていることが示唆された。保育者が積み木場面に参加する場面に着目した検討では，構築物に対するイメージの生成を支援する保育が積み木場面の展開と継続に必要であることが明らかになった。また，保育者が参加した場合，言語的相互行為の割合が高くなる傾向にあることが示された。相互行為が促進される場面における保育者の言語的行為は，幼児の行動を統一させる可能性を高めることになる。よってともすれば相互行為による新たな環境の生成ではなく，そうした相互行為は抑制され，場の同質化が促進されるに過ぎなくなる可能性がある。これらのことは，積み木教材を使用する際の配慮すべき課題である。このように一定の意義は見出せた研究ではあったものの，積み木の材質や空間などが異なる他園，他学年などとの比較検討，及び保育者の保育方法の時期的な比較検討といった更なる検討に加え，行為者個々の行為に対し，他児やクラス集団との関係性からの検討や，また日本の保育が他者を含む外的環境との相互行為をどのように志向し支援していくかを検討することは今後の課題である。